障がいのある人と人権

障害のある人と文化・芸術・スポーツ

石渡和実

連載　第11回

「障害のある人と芸術」ということであれば、まず「盲人と音楽」が思い浮かぶ。古くは新春に流れる「春の海」を作曲した宮城道雄、現代ならピアニストの辻井伸行氏であろうか。職業的自立をめざした盲学校の教育もあり、早くから視覚障害と音楽は結び付いていた。「見えないことをカバーするために音感が鋭くなる」といった説もあるが、辻井氏の生い立ちなどを振り返ると、やはり障害の有無ではなく芸術的な才能が大きいと考える。

ピカソも発達障害があったと言われる。アインシュタインやエジソンなど天才と呼ばれる人々に発達障害があったとの指摘は多く、今、文部科学省でも「gifted（特異な才能のある）」といった言葉に着目して検討を続けている※1。自分の興味・関心を追求し続けることが芸術や科学などの分野で大きな功績を挙げ、その結果、社会も新しい価値に気づくことになるのかと考える。最近は「アール・ブリュット」という言葉も広まり、これはフランス語で「生（なま）の芸術」を意味し、専門的な美術教育を受けていない知的障害や精神障害のある人の芸術が高い評価を得ている。こうした流れの先駆者と言えるのが、細密な描写に特徴がある山下清氏であろう。入所施設から放浪の旅に出た生涯は「裸の大将」というドラマになり、「画伯」と呼ばれるようになった。今、自閉症の人たちが描く「山下タッチ」の作品が脚光を浴び、海外で個展が開かれたり、雑誌の表紙を飾ったりしている。

俳人・正岡子規が結核患者であったことはよく知られている。療養所に閉じ込められた患者が唯一社会とつながる窓が俳句や文学で、これを「療養文学」と呼ぶという。ハンセン病や障害のある人も同じで、「隔離の文学」といった言葉も注目されている※2。言語障害があり書字も困難な脳性マヒの人には５・７・５の17文字の俳句が親しみやすく、1947（昭和22）年には同人誌『しののめ』が創刊された。寝たきり状態にありながら『病牀六尺（びょうしょうろくしゃく）』を著した子規の作品に悲嘆や暗さはなく、日々の生活や四季の移ろいを淡々と写生している。そこに子規の偉大さを実感し、共感する障害者は多く、『しののめ』でも自らの暮らしを大切にし、感情の機微を表現した作品が多いという。

このように障害のある人の芸術作品やそこから生まれた文化は、自らの存在を肯定し、それぞれの特性や生活様式を踏まえた発信を続け、社会に新しい風を吹き込むことになった。特に音楽やスポーツにおける障害のある人の活躍は、理屈ではなく人々の心にスーッと溶け込み、社会の意識変革をもたらしていると言えよう。辻井氏や車いすテニスの国枝慎吾氏などは、その代表格である。優生思想（本誌６月号参照）が蔓延（はびこ）る社会に新しい価値観を生み出し、新たな人間観を築きつつある。スポーツも障害のある人とない人が一緒に楽しむボッチャなどが広まり、障害の有無という境界線がなくなることが期待される。これが国や人種、宗教などの違いを超える芸術・スポーツの「強み」であり、人権教育も新たな段階を迎えようとしている。

※１）文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/169/index.html

※２）荒井裕樹『隔離の文学―ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス、2011 年
https://leprosy.jp/special/books/2381/

いしわた　かずみ　東洋英和女学院大学名誉教授。埼玉県や横浜市のリハビリテーションセンターに勤務の後、東洋英和女学院大学等で『障害者福祉論』『人権論』を担当。日本障害者協議会（JD）理事、東京都社会福祉協議会理事、世田谷区障害者施策推進協議会部会長などを歴任。2016（平成28）年には、津久井やまゆり園事件の神奈川県検証委員長も務めた。障害がある人の想いを尊重した地域生活支援、ネットワークの構築などについて活動を続けている。